目から鱗の昼食会

その手があったんか～と思いました

思わぬ奇襲攻撃である。「その手があったか!」と、私は膝を打って感心したのだが、それは…。

大阪大学総合学術博物館は、文化庁の助成で社会人を対象にした「大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座」として「記憶の劇場」を開講した。美術や音楽、演劇、マチカネワニ化石のレプリカ作成など、様々なジャンルの芸術活動にかかわってアート・マネジメントが出来る人材を育てるプログラムである。六つの班に分かれ、私は「地域文化の発信・顕彰とメディアリテラシー」というプログラムを担当した。

メディアリテラシー(media literacy)とは、世の中に氾濫する膨大な情報を、なにが正しく、なにが間違っているかなど、主体的に吟味して真偽を見抜き、それを活用する能力のことだ。活動テーマの対象には「大阪の街」そのものを選んだ。

歴史ある文化的都市にもかかわらず大阪は、マスコミなどがリードする過度の“おもしろイメージ”で語られがちである。大阪が培ってきた文化的価値を現地取材によって自分の目でとらえなおし、その魅力を発信・顕彰する小冊子を作成するのが、わが班の課題だ。

対象地域は、近代以降に中央公会堂など文化施設が集積した中之島と、江戸時代以来、大阪随一の繁華街である道頓堀の二地区に限定した。この二地域は、最近の呼び方で《水の回廊》と呼ばれる川筋でつながっている。現地調査として、道頓堀から木津川、中之島、東横堀から再び道頓堀に戻る調査クルージングもおこなったり、中央公会堂の特別室で蓄音機がどのように響くかのミニコンサートもした。「月刊島民」を刊行する株式会社140B(イチヨンマルビー)の代表取締役・中島淳さんのご指導もえて、小冊子の完成後には活動成果を展覧会に仕立て、阪大博物館で公開した(2月27日～3月11日)。

上方浮世絵館の見学や「街はミュージアム!」として道頓堀班が注目したのが、田辺聖子さんの評伝でも有名な岸本水府(きしもと すいふ)が川柳で「大阪に住むうれしさの絵看板」と詠んだ、文楽、歌舞伎、映画など劇場の絵看板だった。相手は天下の繁華街・道頓堀である。なにを中心テーマにするか熱い議論がくり返され、まとまるのかなと少し心配だったが、「どうとんぼり」か「とんぼり」か「どとんぼり」か迷いつつ、一冊仕上げたのは社会人の底力である。通りで発見したさまざまな看板、店から突きだして排気筒に着目したのもおもしろい。

かたや中之島班は、吉原治良(よしはら じろう)をリーダーとした具体美術協会の本拠地「グタイピナコテカ」に注目した。パリのシテ島やベルリンの博物島など、世界の大都市の中央に位置する中州にはアートが詰まっている。それに触れて欧米の都市と比較し、大阪新美術館の建設が動き出した未来の中之島へ期待を込めた。

加えて、中之島班のおもしろい企画は、「中之島お結びIsland」である。江戸時代の中之島には全国諸藩の蔵屋敷が密集していた。それを身近な感覚で疑似体験するという趣旨の昼食会が企画された。参加ルールは、メンバーが実際に中之島にあった蔵屋敷の代表となり、各自担当の藩の名産品を持ち寄って、机に広げられた中之島の地図の蔵屋敷の位置にならべ、それをおかずに、米俵の形に握った“おむすび”を食べるプロジェクトである。

因州鳥取を担当の私は、名産品がどこで入手できるか迷ったが、フェスティバルタワーに鳥取市の農産物や加工品を扱うアンテナショップがあり、巨大な梨、とうふちくわを買った。現代の名産品であるのはやむなしとして、仙台の牛タン、薩摩のそらまめ、宇和島のじゃこ天、岡山のきび団子、熊本の馬肉バーベキュー、明石の釘煮などが中之島の絵図にところ狭しと並べられた。

これまで私は、幕末の錦絵「浪花百景」の堂島や中之島を語り、近代の中之島についても何度も書いたり語ってきたが、こんな発想はなかった。大学と社会との交流は、こうした形でも新鮮な関係を開拓していくことが可能なわけだ。

展覧会でも、この昼食会の様子を再現したジオラマが展示された。橋の欄干を切り抜いた手作り感がなんともたまらない。「早速、おとのさまにご注進せずば」と蔵屋敷の役人の気持ちで呟(つぶや)いた。

このプロジェクトでは堂島の米市場の旗振り通信もジオラマで再現された。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』(創元社)など。